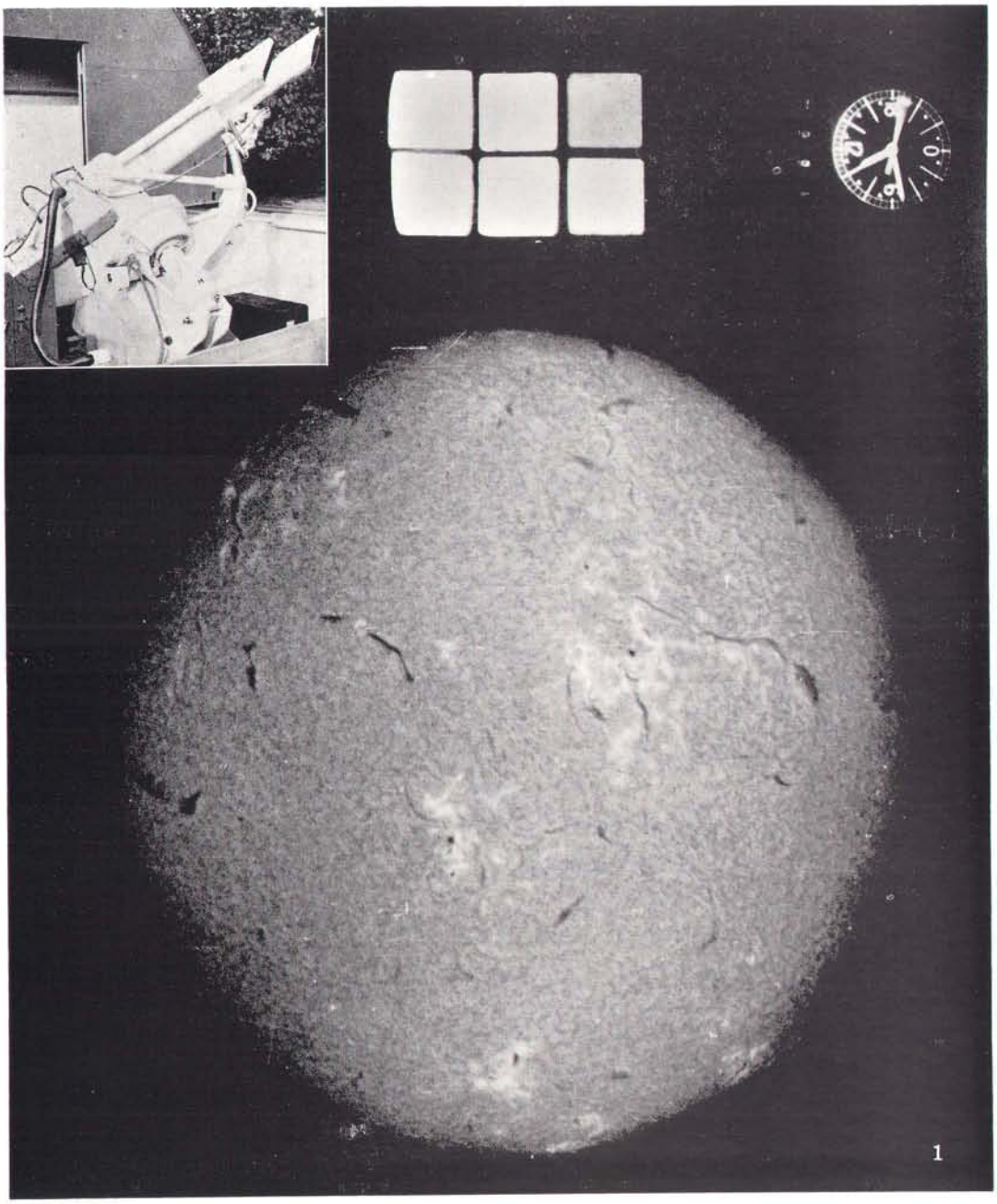
月報アルバム

東京天文台単色太陽写真儀でとらえた太陽

東京天文台の単色太陽写真儀は過去数年来活躍を続けてきた（天文月報 1958 年1月号アルバム参照）が，そのとらえた太陽像は，あまりこの紙上に紹介されなかったように思われる．そこでここでは，やや古いけれども，華やかなりし太陽を偲び，来るべき極大期に想いを馳せたい．

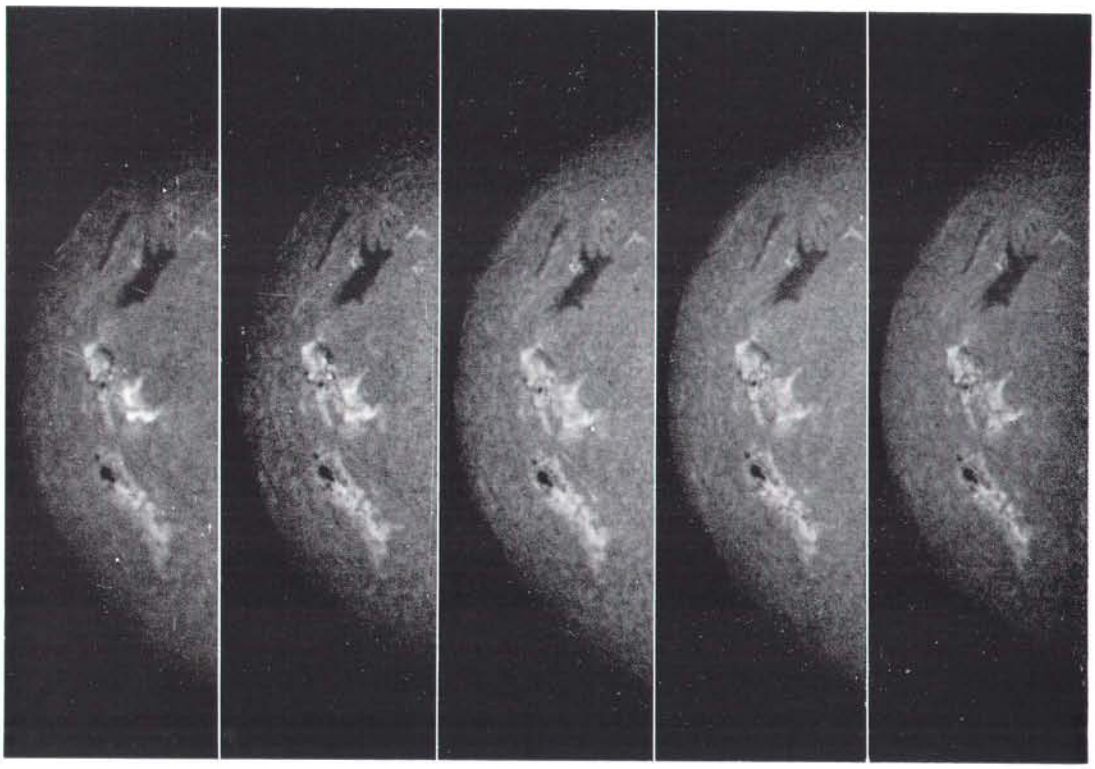
1. 単色太陽写真儀でとらえた太陽

水素の赤い線（H_α）で見た活潑な太陽である．黒いプロミネンス，黒点，明るい活動域（プラージ）が見える．（表紙の静かな太陽と較べて頂きたい．）フイルムには外に撮影時刻や濃度測定用のマークが写っている．左上隅は単色太陽写真儀．



2. 爆発に伴う静止型プロミネンスの変貌（1959 年 3 月 21 日）

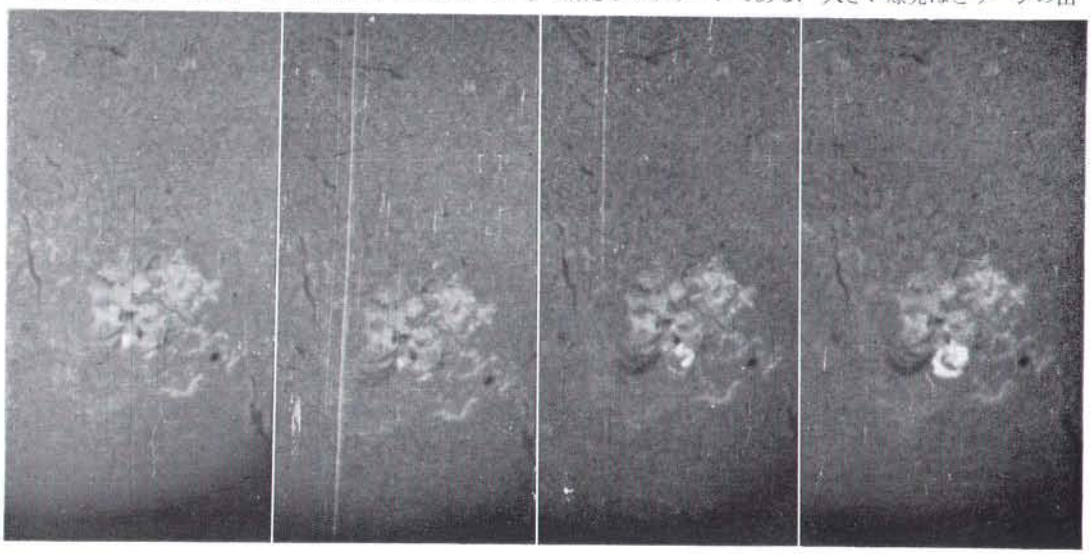
各コマの中心あたりに生じた爆発がその上方に黒く見える静止型プロ sec ぐらいである.



$11^h\ 05^m$　$11^h\ 30^m$　$11^h\ 45^m$　$12^h\ 00^m$　$12^h\ 15^m$

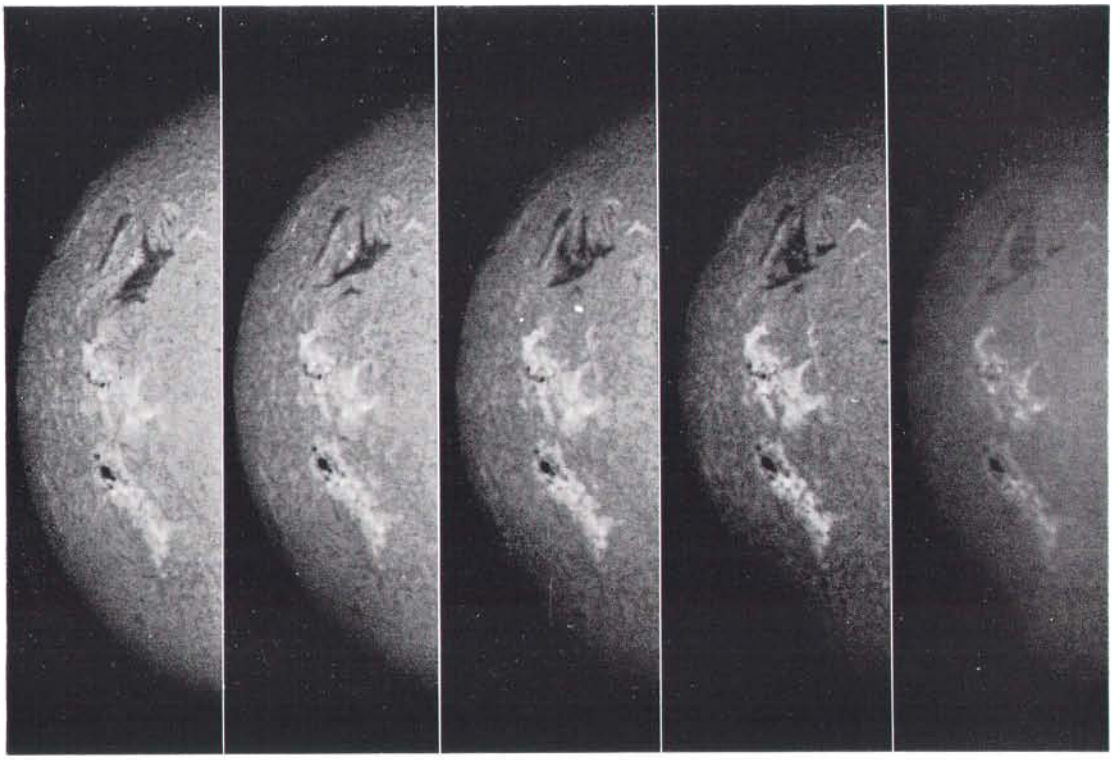
3. 爆発（重要度 2^+）時に発生したサージ（1959 年 5 月 13 日）

最初の爆発点から左側へ黒くひげのように伸びていって消えるのがサージである. 大きい爆発ほどサージの出



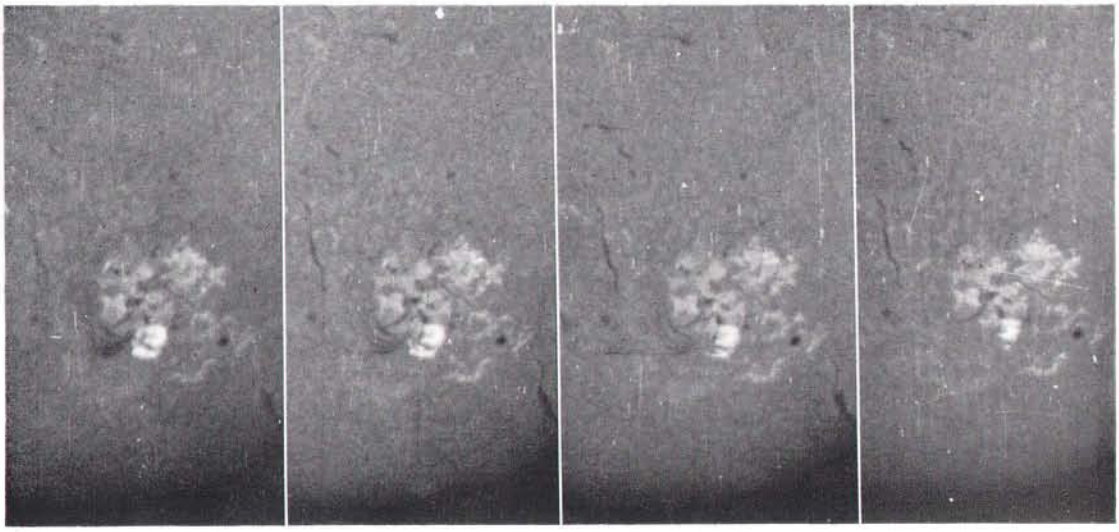
$14^h\ 03^m$　$14^h\ 07^m$　$14^h\ 11^m$　$14^h\ 14^m$

ミネンスに2時間近くたってから影響を及ぼすのがわかる．影響の及ぶ速さを大ざっぱに計算すると 400 km/



$12^h\ 30^m$　$12^h\ 45^m$　$13^h\ 00^m$　$13^h\ 15^m$　$13^h\ 34^m$（雲）

る確率が高くその上昇（或は下降）速度は 100 km/sec 程度とされている．



$14^h\ 16^m$　$14^h\ 18^m$　$14^h\ 21^m$　$14^h\ 30^m$